

山田孝雄先生を追慕して

佐藤喜代治

山田孝雄先生の長逝を思ふにつけて、まづ心に浮ぶのは、先生もつひに歴史上の人物となられたといふことである。先生の講義された国語学史は、最も新しい人としては、大槻文彦博士で敘述が終つてゐる。現に生存してゐる人物を歴史的研究の対象とすべきではない、生存してゐる人間はこれからどれだけ活躍するかわからない、人間の評価は棺を蓋うて定まるといふのが先生の考へであつたやうだ。国語学史を説かれる先生自身が正にその生きてゐる人間であつた。その先生が長い活躍を停止して、人の評価を受けるべき立場に転じられた。誠に感慨に堪へないものがある。今後、先生に対して色々な評価が下されることであらう。正当な評価を下すには多少の時日を要すると思はれる。山のふもとにゐては山の大きさがわからないやうに、今まで近くで先生を仰いでゐた私ごとき者は、その全貌をきはめてもをらず、従つてこれに評価を加へることは到底その任に堪へない。しかし、ただ私事を回想して紙面を汚すことは、私のいさぎよしとしない所であり、先生も恐らく好まれないであらうと思ふ。ここでは私が受けたいくつかの教訓をしるして、先生をしるぶよすがとしようと思ふのである。

先生の学問の博く深かつたことは今ここに取り立てて言ふまで

もない。それは国語学とか、国文学あるいは国史学とか限定するものではない。金石文研究のやうな、類ひまれなものもある。国語学・国文学・国史学など、いづれの学問においても現在には、過去とは比べものにならないほど進歩発展をとげ、その全般に通ずることは至難といふよりも、不可能であり、専攻はますます細かく分れる一方である。これは学問の進歩のためには止むを得ないことであり、喜ぶべきことかも知れない。それだけ全体の統一が見失はれるおそれもある。先生はかつて「科学」の「科」は分れるといふ意味である、この分析を主とする科学に対して、総合を主とする学問といふことを考へてみる必要があると言はれたことがある。このことは国語学についてだけでもなほ反省してみる価値のある問題ではないかと思ふ。

先生の学問はただ博いといふだけでなく、観察が徹底してゐる所に特色がある。文字通り底に徹するまで物の道理を究めつくさなければ満足のできない人であつた。その気魄と精力とが多数の著書・論文となつて現れたので、それらの業績をうかがへば、このことが至極明白である。道理を明らかにするためにあらゆる資料を尋ねられた。しかも早急に結論を出さず、長い間問題をあたたためて居られたやうである。各種の文献をあさることはもとよ

り、実地に調査を試み、時として市井田野の人々からも学び取ることを怠らなかつた。「七色唐辛子」の「七色」の意味がわからなくて唐辛子売に尋ねたことがあると、笑ひ話をしてをられたこともあった。事の実相を究め、その基礎に立って断定されるので、誠に快刀乱麻を断つがごとく、その所論には強い自信を持ってをられた。真実の前には先輩も無ければ弟子も無かつた。ある機会に「自分には師匠も無ければ門人も無い。」ともらされたこともあった。そこでは全く私情の介入することを許さなかつた。「研究」の「研」は砥石にかけて研ぐという意味だから、苦しいのは当り前だとも言はれた。しかし、質問などに対する指導の懇切さは格別で、かゆい所に手が届くやうに説明され、所蔵の文献は快く貸して下さつた。文献を独占秘蔵して自分一人の功名を立てるのを憎まれた。

自分の調査・研究はすべてみづから納得のゆくまで行はれ、手に委ねるといふことが無かつた。著述でも人に名儀だけ貸すといふやうなことは無く、極めて潔癖であつた。清濁併せ呑むといふ風が無く、常に理非曲直を弁へられた。先生の異常な能力によって多くの業績が残されたが、それにもかかはらず、恐らく一生を通じて念頭を去らなかつたと思はれる国語辞書編集の事業が十分に完成を見なかつたのは、やはりどこまでもその研究態度を堅く持してやまなかつたためと思はれる。それにしても、先生の博学多識と、精力気魄とをもつてして、なほかつ初志の実現を見なかつたのは、諸種の障礙があつたとはいひながら、そこに人間の力の限界を認めざるを得ないであらう。国語辞書の編集は国家的

事業として行はるべきものである。それは多くの学者の協力によって始めて可能になる。ただし学問の過去ならびに現状を考へる時、人文科学における共同研究が実際にはいかに困難であるかを誰しもが身にしみて感じてゐる。ここにもむづかしい問題が残つてゐるのである。

先生の学問は常に実証に裏付けられてゐる所に、その強みがあつたが、それは単に事実のせんさくに終つたのではない。その事実が一体何を意味するか、その価値を大局から判断し、また大局から見ても重要と認められる事実をどこまでも究明するといふ態度であつた。事実の考証が徹底してゐたばかりでなく、事実に対する解釈判断が群を抜いてゐた。理で押しつめるだけ押しつめてみて理論上かくあるべしと考へた所をさらに事実の上で証拠立てるといふ風があつた。実際に調べることなく、臆測・推論に止まるのは学問でないと云つて嫌はれた。こんな風で、先生の話は事実に基づき道理になつてゐたので、大して教養の無い人でもよくわかつて感心することが多かつた。先生は巧まずして妙を得た話し手でもあつた。

理論と実証とを兼ね備へたことは先生の学問のすぐれた特色であつた。文法について言へば、その理論的な面を展開してゐたのが「日本文法論」に始まる体系的の研究であり、実証的な面を發展させたのが「奈良朝文法史」を始めとする一連の歴史的研究であつた。文法の体系的の研究にしても、単なる理論に終らず、理論が国語の事実即してゐるか否かを絶えず反省顧慮されたことは、その著述を一読すれば、容易に認めうるであらう。哲学・論

理学・心理学までひろく参照してをられ、それらは言語研究の立場から見れば、無くもがなの観もあるが、それは理論の徹底を期し、その所論が理にかなふ所以を縦横に論断しようとするためだけに外ならない。ここに始めて文法に関する理論らしい理論が生れたのであるが、先生の文法論は理論にだけ終始するものではない。直訳的な文法説が続出した後をうけて、その弊を矯め、国語の事実即し、しかも言語の理にかなった文法体系を樹立しようとした努力を見逃がしてはならない。およそ言語の学問は経験的事実を対象とするもので、事実を離れた理論は価値が無いといふことは、私が先生から受けた最も大きな教訓の一つである。また、この点から先生の文法理論も解釈し批判すべきであると考へる。先生の文法理論にして、もし国語の事実に適合しない点があるとすれば、その事実を明らかにして訂正のために努めることはむしろ先生の本意とする所であらうと思ふ。一般に「山田文法」と言へば、——かういふ呼び方は私の好む所ではないが——文法を口にする者が誰一人知らない者は無いほどであるが、それでも名のみことごとくして、実際にはどれほど正しく理解され正しく批判されてゐるのであらうか。この疑ひが私一個の感想に止まることを、私はひそかに、こひねがつてゐるのである。現在、学問や教育の世界では、一方で次々と新説異論を唱へて、謙虚に人の説に耳を傾ける態度が乏しく、他方では事大主義に陥つて、みづから調べめぐら考へる態度が欠けるといふ傾向があるやうにも見受けられるが、如何であらうか。この世界だけでは過当競争と、附和雷同とだけは避けたいものである。

先生は文法については堂々たる体系を建てられたが、国語全般にわたる学問的体系を確立するところまではいかなかった。国語学の概説または概論といふべき著作を残してをられない。先生の考へでは、国語学はまだ概論としてまとめられるほどに発達してゐないので、講義しないのだといふ話を、ある時先輩から聞いたやうな記憶もある。先生は自分で直接調査研究したことだけを講義されるといふ風で、人の説を紹介して全体を組織立てるといふ余裕は無かつたやうに思はれる。それだけ国語学全体から見ればむらがあるとも言へよう。近世語・現代語についての研究が乏しいのは、ひとり先生だけが責めを負ふべきものではない。先生には音韻論が無いといふ批判もある。東北大学ではかつて国語音韻論を講義されたことがある。私が直接聴講したわけではないが、先輩菊沢季生氏からノートを拝借して写してゐる。その中には例のP音考に対する批判もあるが、清濁についての詳しい論などは興味深いものであった。先生が東洋の音楽に詳しいことは、「源氏物語の音楽」といふ著述があることによつても知られるが、東洋の音韻字は音楽と結びついてゐる点があり、この方面から音韻を観察することは意義のあることと思はれる。この方面の研究が十分展開されなかつたのは、国語学全体の体系化とともに、惜しむべきことである。

先生は全体の均衡・調和といふことに必ずしもとらはれなかつたやうである。常に事の本末軽重を考へ、物の本質を考へてをられたやうに思ふ。「国語政策の根本問題」(昭和七年)、「国体の本義」(昭和八年)、「国語尊重の根本義」(昭和十三年)、「国

学の本義」（昭和十四年）、「教育の神髓」（昭和十六年）、「国語の本質」（昭和十八年）のやうに、書名を並べてみて、その一端がうかがへるかと思ふ。根や幹または茎だけが大切なのではなく、枝も葉もそれぞれに必要な役目を持つてゐるには違ひない。けれども物にはおのづから順序がある。本立つて末生するのである。その意味であらゆる場合に第一義的なものが何かを尋ねることは、研究の場合も処世の場合も重要ではないかと思ふ。これもまた私が先生に学んだ重大なものの一つである。連歌を指導される場合にも、常に語の本意といふことを重んじられた。月を詠み花を詠むにしても、ただ「月」といふ語、「花」といふ語を詠みこむだけではなくて、月や花を賞翫する気が無ければならないと言はれた。一語一句を粗末にしないといふことも先生から学んだもの一つである。

物事の本質・本義を考へるに當つて、常に考へられたのは、現在あるものは、本来どんな性質のものか、それが本来のものであるかといふことであつた。そこから常に物事の源流をたどることに努められた。多くの歴史的研究もかういふ点に動機があつたかと思はれる。仮名遣の問題に伴つて「仮名遣の歴史」を書かれ、君が代の問題が起つて「君が代の歴史」を書かれたのは、その著しい例である。

もとは谷川の清水であつたものも、次第に多くの支流と合流するに至れば、もとのやうに純粹であることができず、多くの濁り水と一つにならざるを得ない。流れの本質を極めるためには、その水源から河口に至るまでの全体を明らかにした上で、総合的に

判断を加へなければならぬ。先生にあっては、どちらかといへば、上流をたどり水源を探るに急であり、それをもって本来のあべき姿と断する傾きがあつた。近世の風俗習慣にも通じてをられ、俳諧については最も深く研究されたが、その研究は全体として見れば古代のものが多く、そこには国学者らしい所が見られる。この立場に立つて物を見られる時、観点を異にする人々との間に意見の対立相剋も生れざるを得なかつた。「立派」はあて字であつて、「立破」が本来の書き方であるとしても、現実には「立破」が正しい書き方であるとすべきかどうか。あて字が長い間習慣として行はれるに至れば、単にあて字として退けることはできないといふ場合もある。これらについても容易には解決し難い問題があるのである。

先生は常に第一義的なもの、本質的なものを重んじられた。先生にとつて最も第一義的なものは何かといへば、それは恐らく国家であつたと思はれる。先生の学問は常に国家とつながつてをり、その意味で国學と呼ぶべきものであつた。ただ先生の説かれる国學、荷田春満から始まる国學は、国語の学問を第一の基礎とするものであつた。従つて少なくとも国語に関する限り、その態度はどこまでも学問的であり、實際的要求のために国語の眞実をゆがめるといふことはなかつた。国語学を講ずる教室で国體を論ずるといふやうなことは無かつた。学問を直接實際問題に結びつけることを避けられた。国語学の中で国語の實際問題を論ずるのは誤りであるといはれた。その点で先生は純粹に学問を愛されたと言ひ得る。学問を好み眞理を愛する先生の学究的な態度と、国家を

思ひ社会を憂へる先生の経世家的態度とは時として別物ではないかと疑はせる面すらある。私の見聞する限りでは、先生の学者としての業績を高く買つて、その思想をむしろ遺憾とする人と、反対に先生の憂国の至情に感奮しながら、その学問を知らない人である。それは共に先生の本意にそむくのではないかと思ふが、それだけ先生の人間の大きさを示すものとも言へよう。

学問と実際との関係も絶えず我々を悩ます問題である。国語学について言へば、国語の実際問題と手を切り、国語の現象をありのままに観察することによつて、国語学が現在純粹な学問としての成長を上げてきたと言へる。けれども一方から見れば、実際と結びつかない学問に果してどれだけ意義があるのであらうか。現に最近の国語学は好むと好まざるとにかかはらず、国語の実際問題と無縁ではあり得なくなつてきたやうである。実際的な要求のために学問がゆがめられることなく、しかもなほ現実の問題に答へるために、学問はいかに対処すべきであらうか。ここにも解決を待つてゐる問題がある。

先生は学問を愛し国家を愛へ、そのためにはいささかも私情におぼれることが無かつた。それは自分自身に対しても同様で、最後まで簡素で清浄な生活を送られた。戦後、先生がある新聞に書かれた短文に、「正しきを忘れて名利に走り回る人の多さよ。私は永遠の道の為身をも名をも顧みぬ人を心から好む。」として、伯夷・叔齊と、ガレリオと、蘇我倉山田石川麻呂とをあげられた。これは恐らく一生を通じた心境であり、殊に晩年切実に感じられたことと思ふ。この信条が先生の思想を生み、学問を生み、

行動をささへる原動力であつたと思はれる。先生の思想も学問も今後いろいろ修正を要する場合が生ずるかと思ふけれども、その根幹となつた人格の力は恐らく永遠に加ふる所が無く、常に導きの星として輝くことであらうと信ずる。

私はできるだけことばを慎しむとして、むしろ多く語り過ぎた感じがする。今、過去をふりかへつてみて自分の記憶がいかに不確実であるかに驚いてゐる。なほ、私は山田先生の著述のすべてを読んでゐるわけではない。このやうな自分が先生について語る時、多くの過ちを犯しはしないかを恐れる。従つて、ここでは努めて私の見た先生、先生について私の考へる所をできるだけ卒直に述べようと思つた。先生の姿を正確に浮き彫りにしようとは思はなかつた。先生の教へを忠実に伝へることはできないかも知れないが、私は私なりに学んだ道を、自ら確かめながら踐みしめて行かうと思ふ。それが、先生の厚恩に報いることにもなるかと思ふのである。

—東北大学教授—